

プロへの道 二人三脚



岩瀬さん(右)から指導を受ける筒井さん＝稲沢市井之口大坪町の稲沢グランドボウルで



稲沢グランドボウル③

師弟関係の男女ボウラー

私語禁止の張り詰めた緊張感の中、ピンのはじけ飛ぶ音だけが響く。二〇一八年五月、東京都内であったボウリングのプロテスト最終日。「今度こそ。何とか合格してくれ」。稲沢グランドボウル(稲沢市)を拠点とするプロボウラー、岩瀬一真さん(四三)は、祈るような年上の教え子を見守っていた。

筒井さんの競技歴は浅かった。三十代になったころ、勤めていた会社でできたボウリング部に入った。経験は学生時代に数回程度。最初は数合わせで、名前を貸したつもりだった。「ボールが曲がるのは床の板が傾いているから、と思

近くで投げるのになら、「もう少し変えたらうまくなる」と感じた。当時、筒井さんを教えていた友人に伝えたところ、岩瀬さんが稲沢で開く教室に来ることになった。

筒井さんの競技歴は浅かった。三十代になったころ、勤めていた会社でできたボウリング部に入った。経験は学生時代に数回程度。最初は数合わせで、名前を貸したつもりだった。「ボールが曲がるのは床の板が傾いているから、と思

近くで投げるのになら、「もう少し変えたらうまくなる」と感じた。当時、筒井さんを教えていた友人に伝えたところ、岩瀬さんが稲沢で開く教室に来ることになった。

「もう辞めようかな」。自信が持てず、何度もそう思った。踏みとどまらせてくれたのは、岩瀬さんの言葉。「自分が筒井さんの一番のファンだから」。三年前、七回目のプロテストで、初めて一次試験を通過した。二次、三次試験も乗り越え、合格を果たした。プロになった筒井さんは稲沢グランドボウルを拠点とし、現在も岩瀬さんから指導を受ける。楽道家とストイック、技巧派とパワータイプ。性格も投球スタイルも真逆の師弟は、時にぶつかることもある。それでも、目指す針路は同じだ。プロでは結果が出せない筒井さんだが、「いつかは活躍して、恩返ししたい」と誓う。岩瀬さんも「焦らず平常心で臨めば、上位に食い込む実力はある」と信じる。二人三脚の挑戦のゴールは、まだ先にある。(牧野良実)

「世界一」の裏側支える



稲沢グランドボウル②

熟練のメカニック

工場のような空間を、青の作業着の男性が行ったり来たりする。機械の中では、ピンやボールがぐるぐる回る。ちよつとした音の違いや足元の振動が異常を

示すサインという。「どこかの部分がおかしくなりそうか分かるんです」。長年、体に染み付けた感覚が判断を支える。

一フロアに百十六レーンが並び、ギネス世界記録に認定される稲沢グランドボウル。国内最大規模の大会も開かれる一大施設だ。照明を浴びたレーンの脇の扉を開けると、メカニックの田代勝三さん(50)の仕事場がある。

そこでは、レジャーの空気が一変する。ピンを並べ、ボールを戻す高さ二層ほどの機械が、レーンの数だけ並び、端から端まで約二百層。歩いて点検しながら、時折、ライトで照らし、機械に体を突っ込む。

旧清洲町(現清須市)で生まれ育ち、子どもの頃から、家族で遊びに来ていた。当時は一番軽いボールでも八割(約三・六キ)。親に言われ、頑張って片手で投げたが「ガター(溝)の掃除ばかりしてたっけ」と懐かしむ。

裏側の住人となったのは、二十一歳の時。高校卒業後、電気工事や鉄工所の

仕事が続きせず、グランドボウルのメカニックの求人が目についた。人と接するのは苦手だが、工作や部品の組み立ては好き。そんな自分に向いているかも、と思えて入社した。

仕事では、多くの時間を裏側で過ごす。ストライクを取って歓声を上げる家族連れ、スコアを競って盛り上がる団体客の姿もほとんど目にすることはない。

客足を感じるのは、動いている機械の数。入社当時はフル稼働する日が多く、モーターの熱で裏側の温度も上がった。「昔は冷暖房がなくて。冬はありがたかったけど、夏はたまらなかったなあ」と笑う。

ボウリングブームが去り、最近では機械が止まったままの時間も増えた。それでもやってきてくれる人たちのため、整備を万全にする心掛けは変わらない。

当たり前のようにボールが戻ってこなければ、ピンが並ばなければ、もう来ようとは思ってもらえないだろう。「小さい時から家族で来てたら、大人になっても続けてくれるはず」。わが子のように日々、変化を見てきた機械たちが、また一斉に動く日を待ちわびる。

この一投こそわが人生



①1972年の開業当時から通う川口さん
②1フロアに116レーンが並び、ギネス世界記録に認定されている稲沢グランドボウル
=いずれも稲沢市井之口大坪町で



稲沢グランドボウル①

開業以来の常連

人生で何十万投目になるのだろう。淡々と投げたボールはレーンでいつものような弧を描き、白いピンをはじき飛ばす。多くの人は知らないだろう。稲沢グランドボウル(稲沢市井之口大坪町)の五十七、五十八レーンに陣取るこの男性が、五十年、ひそかに道を究めてきたことを。

今月初め、開場前の午前八時半。「従業員よりも来るのが早いんだわ」。ユニホーム姿で現れた川口治一さん(七十七)はそう笑った。一宮市の自宅から週三日、自転車で三十分かけて通う。開業当時の常連に、

「この生き字引ですよ」と従業員たちも一目置く。勉強は苦手だった。体を動かすのは好きだったが、スポーツを気軽に楽しむような時代ではない。中学卒業後、一宮駅前の食堂に就

職。月一回の休みに、近くのボウリング場に遊びに行くのが気晴らしだった。根城を定めたのは、二十代半ば。三菱電機稲沢製作所に転職した数年後、二百三十二レーン(当時)を備えた稲沢グランドボウルがオープンした。

時はボウリングブーム。同僚に誘われ、通うようになった。「投げるたびにスコアが上がるのが、うれしくて」。仕事を午後五時に終えると、週二、三日、足を運び、多い日は十五ゲーム投げた。好きが高じて社内でもボウリング同好会もつ

くった。

ボールを投げ、ピンを倒す。単純なようで確認作業は無数にある。複数あるマ

イルの塗り具合で曲がり幅が変わり、わずかなフォールの狂いで、軌道がずれる。同じ一投は決してな

り、がん、心不全と病に襲われた。それでも「ボウリングのない人生なんて」と投げ続けてきたが、昨年春、思いがけずレーンから離された。新型コロナウィルス。緊急事態宣言が出され、ボウリング場が約一カ月、臨時休業した。用もなく近所のスーパーを歩き回り、時間をつぶした。

今、あらためて実感する投げられる喜び。今月、約五年ぶりのパーフェクトに迫った。最後の一投で一本残し、生涯二十三度目の瞬間を逃すと、「こそ、うまくいかないねえ。また頑張らないと」。求める理想の一投は、まだ先にある。悔しそだが、うれしそでもあった。(牧野良実)

(このシリーズは全四回で